

25. 圧迫性脊髄病変に対する高気圧酸素療法を検討

吉田恒丸*¹⁾ 山崎典郎*¹⁾ 田中秀昭*¹⁾
 久野宗和*¹⁾ 森久保治道*¹⁾ 松本眞彦*¹⁾
 杉山弘行*²⁾ 神山喜一*³⁾

* ¹⁾	都立荏原病院整形外科
* ²⁾	同 脳神経外科
* ³⁾	同 高圧酸素治療室

【目的】圧迫性脊髄病変とこれに起因した障害は、脊髄変形と髄内血行不全の病態を速やかかつ脱髄発現以前に解除することが肝要だが、主治療の選択は年齢、全身的要因、罹病期間、障害程度、患者側ニーズ等に制約される側面があり、治療成果は多様である。これに対し高気圧酸素療法（OHP）が主治療を支える補助効果や待期段階における維持効果を発揮しうれば、臨床の有用性が高いと考え、適宜症例に対し実施してきた。今回これらの効果と限界を探る目的で、OHP実施症例につき検討した事項を報告する。

【方法】対象は頸椎症性脊髄症17例、後縦靱帯骨化症17例、脊髄腫瘍等3例である。症例を主治療の手術的治療期（A群）、保存的治療期（B群）と、術前期または通院期の対照期（C群）に区分し、OHPはこれら各期で連続または間欠的クールで実施し、症例により観察期間中自然経過期であるOHP非施行期（D群）を設定した。効果判定は整形外科学会頸髄症判定基準と、OHP施行後の改善感覚により評価し、各群間での治療後向上点、改善率、体験評価点を分析した。

【結果】1)向上点はA群1～7点（17点満点）、B群0～5点、C群0～3点であり、改善率は各々29～64%、0～71%、0～60%であった。2)体験評価点は平均3.8点（8点満点）であり、A群で低くB群で高い。3)D群で33%が向上点をえたが、他は不変かADLの評価が下った。4)発症後比較的早期のOHPは有効であった。5)OHP自体の効果は一過性だが、ADL維持目的の治療に併用し計画的かつ間欠的な実施により、ADL向上が期待できた。6)以上より圧迫性脊髄病変に対し髄内血行と伝導路機能の回復を目的に、主治療に併用する形態の適用と、支持療法としての適用があるが、脱髄状況には適応がない。